

令和8年度 道志小中学校校内研究会について

令和8年4月2日(木) 合同校内研

1 児童生徒の実態

本小中学校は、山梨県南東部に位置する人口約1500人の道志村にある唯一の小中学校である。令和7年度の小学校全校児童は51名(1年12名、2年5名、3年7名、4年13名、5年11名、6年3名)、中学校全校生徒は27名(1年13名、2年7名、3年7名)である。

保育園から中学校まで変わらない単級の関わりを通して、人間関係が固定し階層的序列がある。地域や家庭の教育力により、児童生徒は素直で純朴であり、集団は安定しているが、承認感や被侵害行為認知、活動への意欲や表現力等には大きな差があった。これらの課題は校内研究の成果により改善しつつある(令和7年度実施のWEBQUの結果・面談・観察等より)。

教育振興基本計画を踏まえた山梨県が目指す学校教育には、学力向上の取組の授業改善の中に、令和7年度から「やまなし教育創造推進事業」がある。これは、25人学級導入の影響が及ばない市町村が実施する県の示す教育課題に対応した地域の強みを生かした特色ある取組を支援するものである。本小中学校は小規模校でこれに該当する。

令和5年・6年度は「令和のやまなし教育活動モデル推進新事業」の支援をいただき、特色ある教育活動の充実として「A イエナプラン的教育(自立学習者の育成)」に取り組んできた。

令和8年・9年度は、「山梨県総合教育センター研究推進校」として、研究主題の実現のために、センターと協同研究を推進していく。また、学習指導要領の実現のために、確かな学力を伸ばす教育の充実が求められている。

《改善が求められている具体的な実践》(山梨県教育振興基本計画 p10より)

- (1) 自ら学習課題や学習活動を選択する機会を設けるなど興味・関心を生かして自主的、自発的な学習が促される授業づくりをすること。
- (2) 各教科の「見方・考え方」を働かせられるよう、各教科の特質に応じた言語活動の充実を図ること。
- (3) 教科等の目標を実現するとともに、情報活用能力を育成できるよう、1人1台端末等のICT環境を日常的かつ効果的に活用した授業の充実を図ること。
- (4) 単元や題材などの内容や時間のまとまりで、学習の過程や成果を評価し、資質・能力の育成に生かせるように、指導と評価を一体的に改善すること。

↓

「個別最適な学び」と「協働的な学び」⇒主体的・対話的で深い学び⇒資質・能力の育成

これらのことを実践するためには、固定した人間関係や階層的序列を打破し、誰とでも協働活動・学習に取り組める学級集団をつくるのが前提として必要である。その安定した学級集団を基盤としながら全教科の単元や題材を貫く課題解決学習における単元内自由進度学習を通して、資質・能力を育成(B評価を達成)し、一人一人が主体的で活性化した集団づくりを推進する。また、いじめや不登校、学力向上等の教育課題は、学級の人間関係の充実とルールへの定着に大きな相関関係があると考え、総合的に捉えて対応する。具体的には、標準化検査WEBQUを活用し、指導の優先順位や対応の仕方を共有し、校長を中心にPDCAサイクルで組織対応することを通して、学級の安定を向上させる。また標準化検査NRTやNINOを活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」で、「主体的・対話的で深い学び」につなげ、児童生徒の「資質・能力を育成する」ことで、いじめや不登校、学力向上等の教育課題を改善することを組織実践する。

2 主題について

(1)令和7年度の研究主題

『個別最適な学びと協働的な学びで、主体的に学習する児童生徒を育成する』

～ICTを活用し、児童生徒が自ら学びを生み出す授業づくり～

～組織でWEBQU等を活用した安定した学級づくり～

(2)令和8年度の研究主題の方向性

『個別最適な学びと協働的な学びで、主体的に学習する児童生徒を育成する』

～ICTを活用し、児童生徒が自ら学びを生み出す授業づくり～

～組織でQU・NINOを活用した安定した学級づくり～

3 研究仮説

協働学習の基盤となる安定した学級集団づくりを通して、全教科の個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図れば、主体的に学習する児童生徒を育成できるであろう。

4 研究内容

(1)安定した学級づくりを実現する

学級集団に所属し、クラスメイトと学級目標を共有して、共に学級集団づくりに参画し、集団で協働活動・学習に取り組む。

※安定した学級とは、問題がない学級集団ではない。いろいろな問題を、みんなで支え合い、問題解決していける学級のこと。(支え合い学び合い高め合いのある学級)

(2)教職員組織で協働実践する

児童生徒の実態や協働実践の考え方とやり方について、校長を中心にPDCAサイクルを回す。

(3)安定した学級を基盤に、「単元・題材内自由進度学習」を全教科(小学校は児童の実態に応じて可能な教科)で推進する ※ICTを効果的に活用

①個別最適な学び ②協働的な学び

5 研究方法

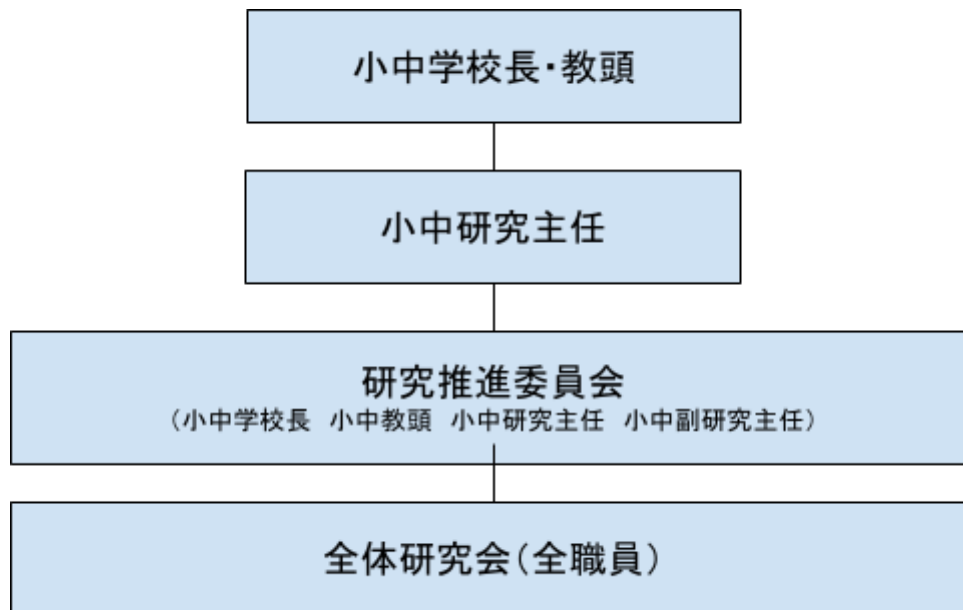
(1)QUを活用した日常的な面談と観察を通して指導の優先順位や方法を共有し、PDCAサイクルで組織対応を行う。

(2)学級目標や学級の課題の達成に参画し、協働活動・学習に取り組む集団をつくる。

(3)NINO・フォーサイト等を活用して、学習方法を選択させることにより、児童生徒の興味・関心を活かした自主学習を推進することにより、自立した学習者を育成する。

(4)単元・題材などの内容や時間のまとまりで課題解決学習における言語活動を通して教科の目標を達成する。(ICTの効果的な活用等)

6 研究組織



7 研究計画

4月2日(木)	第1回 令和8年度の校内研究について全職員で共通理解を図る ・研究の概要、指導案、GKP、座席表
4月7日(火)	NINO検査 * 中学校全学年実施(各学年560円)
4月8日(水)	NRT検査 * 中学校全学年実施 * 小学校は2年生以上で実施
4月9日(木)	NINO検査 * 小学校は2年生以上で実施
4月27日(月)	第2回 授業実践: 中学校①
5月12日(火)	QU調査① * いじめ・不登校の項目は最優先にチェックして即日校長を中心に組織で対応する。
5月13日(水)	第3回 QU・NINOの分析と活用方法について * それぞれ各学級のデータを見ながら個人と集団の実態を分析し、指導の優先事項を複数で検討しながら協働実践できる体制を構築する。
5月27日(水)	第4回 授業実践: 小学校①
8月26日(水)	第5回 学習会(講師招聘「单元内自由進度」または「NINO」)
10月7日(水)	第6回 授業実践: 中学校②

10月14日(水)	QU調査② 調査②(午前) 第7回 QU・NINOの分析と活用方法、公開研究に向けて
10月23日(金)	公開研究会 授業実践:小学校②③、中学校③④⑤
12月10日(水)	第9回 授業実践:中学校⑥
1月19日(火)	QU調査③
1月20日(水)	第10回 QU・NINOの分析と活用方法
2月24日(水)	第11回 1年間のまとめ

8 その他

- (1)児童と生徒の実態に適した、毎日の実践を全職員で協働実践し、支え合い学び合い高め合える・教職員の体制を構築する。
- (2)協働研究を通して教職員の指導力を向上させていく。
- (3)日頃の協働実践を公開していきたいと考えている。持続可能な公開の仕方を模索し、提起していきたい。
- (4)指導主事や専門家から指導助言をいただきながら、連携して協働研究を推進していく。
- (5)指導案検討の際に指導主事訪問要請を行う。
- (6)提案授業への参加体制は、ICTを活用しながら協働研究を推進していく。
- (7)令和8年度校内研究紀要については、総合教育センターへの提出が求められた場合小中合同で作成する。